

公開研究集会 寺社縁起研究の新潮流
— 領域横断的・国際的研究拠点の形成に向けて —
一ノ橋文庫蔵 寺社縁起類 展観目録

[注意事項]

- ・ 観覧に際しては、手荷物・お飲み物などは手にせず、所定の場所に置いた上でご覧ください。
- ・ 古典籍等に手を触れたり、撮影を希望される場合には、展示担当者にご確認ください。
- ・ 判読できる水準で撮影された画像を SNS などに投稿することはお控えください。
- ・ 展示品の所在・内容について学術論文等で言及なさりたい場合には、許可を得てください。

寺社縁起類と能筆の家

1 金剛山勸進帳

〔弘長二年 [1262]、世尊寺経朝〕筆、真祐自筆署名、一軸。表紙等後補。32.7 × 152.9 糎（計三紙）。梨本宮家旧蔵。天地辺は銀泥で引かれ、その上下欄に金銀泥にて花鳥が描かれる。後補箱書に拠れば、世尊寺行尹（1286-1350）を伝称筆者とするが、弘長二年の金剛山大規模修造を領導した勸進僧「真祐」の自筆署名と見られることから、当時、世尊寺家の当主であった世尊寺経朝（1215-1276）の染筆によるものと推定される。縁起・勸進帳について、本文を世尊寺家の能筆が染筆し、勸進僧がその名のみを署名する事例として、他に金剛峯寺蔵『町石道供養願文』（弘安八年 [1285] 世尊寺〔経尹〕筆、覚敷自筆署名）がある。

なお、本書の筆跡は、東京国立博物館蔵『諸徳三礼』と一致する点が多い。これについても行尹筆とする古筆家の極が伝来しているが、本書が弘長二年に遡るものであることから、両者が同筆であるとするならば、古筆家の「行尹」に関する鑑定について再検討が必要となろう。

2 縁起・願文切「夷之声」

〔鎌倉時代中期、世尊寺経朝〕筆。37.4 × 7.4 糎。元禄十二年 [1699] 古筆了眠の極によれば、伝称筆者を世尊寺行尹（1286-1350）とする。『金剛山勸進帳』の手跡と一致する点が見受けられるか。

3 縁起・願文切「以此」

〔南北朝時代〕筆。35.5 × 15.7 糎。鑑定者不詳の極によれば伝称筆者を世尊寺行尹（1286-1350）とするが不詳。打曇料紙に縁起・願文をしたためることは鎌倉時代には類例が見いだせず、六波羅蜜寺蔵貞治六年 [1363] 『六波羅蜜寺本堂修営勸進状』が早い例か（ただし藍・紫）。一般的には、鎌倉時代において装飾料紙を用いて縁起が制作される場合、金銀泥引料紙にしたためられることが多い。ただ、竹生島宝蔵寺蔵貞永元年 [1232] 『貞永元年竹生島造営勸進状』は打曇料紙（藍）を用いているが、金泥引・箔で下絵を描く点、特徴的であるとも言える。

4 縁起・願文切「根也」

〔鎌倉時代後期、世尊寺定成〕筆。31.2 × 7.4 糎。鑑定者不詳の極によれば伝称筆者を世尊寺定成（～1296）とする。下絵、わずかに存。東京国立博物館蔵『平行政願文』（重文。弘安七年 [1284]、〔世尊寺定成〕筆、下絵あり）との筆跡上の類似点が多い。

5 観応二年戒牒 断簡

観応二年 [1351]〔尊円法親王〕筆。31.7 × 17.3 糎。観応二年四月の段階では、尊円は前天台座主。同年十月に尊円によって染筆された延暦寺蔵『東塔院勧学講法則』（素紙本）との一致度が高い。この時に菩薩戒を授けられた沙弥の名は擦り消されているものの、金銀泥の下絵、芦手が施された料紙を用いられている点、戒牒のありかたとして興味深い。なお、同様に装飾料紙を用いた天台大乘戒壇での戒牒としては、建武四年 [1337]「戒壇院戒牒」（伝 尊円法親王筆、延暦寺蔵）、明応二年 [1493]「沙弥恒紀戒牒」（尊応法親王 [前天台座主。~1514] 筆、個人蔵）が知られる。また用途は異なるが、正治元年 [1199]「明全戒牒」（永平寺蔵）にも美しい装飾が施されており、戒牒と料紙装飾および能筆家との関連は今後の検討が俟たれる分野である。

6 地蔵菩薩講式

〔室町時代前期、一条実秋〕筆、文明四年 [1472] 奉納、一軸。44.7 × 393.1 糎。前田家旧蔵。加賀前田家で誂えられた箱の蓋裏には「清水谷殿〈實秋卿〉」とする古筆了雪（1612-1675）による極が貼られる。一条実秋（~1420）は世尊寺行俊に師事し、行俊の死後、子の行豊の幼年期には世尊寺流の宗匠としての地位にあったとされる。ただし、実秋が染筆した清涼寺蔵『融通念仏縁起絵巻』巻上第七段とはやや印象が異なる点もあり、かつ料紙装飾にも金銀箔よりも泥引が目立ち、古様を留めているとも見られる。あるいは鎌倉時代末期から南北朝時代の制作と見るべきか。截金により辺・界が施されるが、巻軸に近い箇所は罫線部に焼けが見られる。截金を貼る際の膠の影響か（蛍光 X 線分析を簡易に行ったが、真鍮・白緑などは検出されなかった）。巻軸には料紙が後補され、「此式不慮之感得□□前禪□追□本家附者也 施主善珍／文明壬辰□月 日」との奉納識語が墨書される。「善珍」、不詳。

7 雪彦山三所権現勸進帳

文明八年 [1476] 六月、明阿自筆署名、一軸。31.4 × 223.7 糎（計四紙）。播磨国飾磨郡賀屋庄（京都新熊野社領）に所在する山岳信仰の靈地、雪彦山三所権現（現賀屋神社）の勸進帳。『兵庫県神社誌』中巻（兵庫県神職会、1938。1080 頁）に〔雪彦山三所権現勸進帳○文明八年〕として全文翻刻されるが、長く原本の所在が分からなかったもの。有辺無界。辺線は截金（銀箔）。天地には金箔散らし、銀箔・野毛。下縁にはやや虫損が見られるが、保存は良好。ただし、現在は除去されている裏打に銀の箔・野毛が散らしてあったためか、本文料紙に焼けが見られる。奥書「文明八年六月 日本願沙門〈明阿〉敬白」。勸進僧明阿は自署。染筆者は不明だが、地方寺社の勸進帳でありながら美しい装飾が施されていることから、当時における能筆の手に抛るものだろう。

東寺観智院・賢賀の聖教修補と寺社縁起

8 七大寺日記（複製）

原本は奈良国立博物館蔵（重要文化財）。東寺観智院伝来 杲宝手沢・賢賀修補本。建長七年 [1255] 逸昌写、一帖。延享四年 [1747] 七月五日、賢賀改裝修補。大江親通が嘉承元年 [1106] に南都を巡礼した際の巡礼記。以後、『七大寺巡礼私記』（〔十五大寺日記〕）、『南都巡礼記』（『建久御巡礼記』）へと連なる南都の巡礼記の嚆矢となった。

観智院十三世である賢賀は、この時期、多くの聖教を修補・改装したことで知られる。例えばこの二日後の七月五日には、観智院僧正真照写『真言伝』を見いだし修補した旨が記される（観智院A本巻一識語。佐藤愛弓『中世真言僧の言説と歴史認識』勉誠出版、2015）。また賢賀は、教王護国寺蔵『弘法大師行状絵巻』（重文。南北朝時代）の各段に「誕生靈瑞」等の標題を付すなど、歴史叙述そのものに関心が深かったと考えられる。次に見るような聖教修補の事例も、杲宝という東寺にとって最重要の僧が書写・所持した「歴史」を保全しようとする意図があったと見ることもできようか。

9 尊勝陀羅尼梵漢対訳

文和三年〔1354〕杲宝写、一帖。延享四年〔1747〕賢賀修補。20.8×15.5 糎。東寺「三宝」の一人と称えられた杲宝（1306-62。東寺観智院一世）が書写・所持した聖教。杲宝と二世賢宝によって撰述・書写された聖教が東寺観智院金剛蔵に所蔵される聖教群の中核となり、江戸時代の十二世杲快・十三世賢賀によって修補された。これらは「東寺観智院聖教類」として15,402件が重要文化財として指定されているが、本資料は、江戸時代に賢賀による修補を経た後に勸修寺に伝来（印記あり）、その後寺外に流出したものであろう。

10 文殊師利所説礼北斗七星本命属星陀羅尼經

〔南北朝期〕写、一帖。杲宝手沢本。延享三年〔1746〕賢賀修補。25.0×15.4 糎。本奥書によれば建仁三年〔1203〕に道曜が永福寺僧房で書写したものを底本とする。本文の筆跡は杲宝ではないと推定されるが、現存くるみ表紙の下にある元表紙右下には、本書が杲宝の所持本であったことを示す自筆の記名が見える。

11 讃州屋嶋壇之浦源平合戦縁起

寛政九年〔1797〕写、一冊。29.2×23.2 糎。讃岐国屋島寺を始め、各地に伝来する『屋島壇浦合戦縁起』の一本。「元暦元年〔1184〕三月廿九日南面山沙門竜胤」なる信じがたい奥書を有しているが、実際には慶長十六年〔1611〕屋島寺龍巖上人によって主導された修造勸進事業の際に制作されたもの。屋島寺本奥書には「此源平縁起^ハ雖^モ有^{リト}古本^ニ、端本破損文字不^レ正^{シカラ}。于^レ茲末代之住侶龍巖上人詣^テ東寺観智院^ニ誂^テ畢。于^レ時元和第九四月日前往屋島後住高雄ノ龍巖上人（花押）」と見え、東寺観智院が他寺の縁起を集積する結節^{ターミナル}点とも言うべき役割を果たしていたことが推定される。

本書は『源平盛衰記』の屋島合戦の叙述を元にし、かつ合戦の日付を史上の元暦二年二月から前年三月に改めるなどの特徴がある。末尾に追記される佐藤嗣信の亡霊と僧信空との和歌贈答説話は鎌倉時代後期ごろから見られ始める説話で、西大寺流律宗の勸進僧が用いていたものと推定される。

南都・紀州の寺社縁起と聖教、その他

12 法華滅罪縁起

〔室町中期〕写、一軸。29.7×777.4 糎。大和国法華寺の縁起。光明皇后が発願した法華寺は平安期には衰退していたが、西大寺叡尊によって寛元三年〔1245〕に復興。本『縁起』はその後、嘉元二年〔1305〕に成立。よく知られるのは『大和古寺大観』所収本（法華寺蔵本）だが、他に前田尊経閣文庫蔵本（〔江戸中期〕写、一軸）、陽明文庫蔵本（『法華寺縁起』、〔江戸中期〕写、一冊）がある。このうち、本書は、

前田家本と同じく末尾に「正応元年〔1288〕比丘尼慈念啓白文」を有する系統であり、尊経閣文庫本識語に見える、東大寺龍松院公慶が所持した一本と推定される。

13 長谷寺密奏記

〔室町後期〕写、一軸。21.4×262.0 糎。鎌倉期に成立した伝菅原道真撰『長谷寺縁起文』と一对をなす、神祇信仰の観点から長谷寺の来歴を説く書。徳道上人は、泊瀬山中で手力雄明神の顕現たる翁と出会い、上人の前生が役行者であると告げられたことによって、伽藍創建と本尊建立を発願する。百日の参籠を終えた徳道上人は、十一面観世音菩薩の影向を得て、それが日輪すなわち天照太神の本地であることを大日如来（顕教においては毘盧遮那如来）によって明らかにされる。最古の写本としては金沢文庫本が知られるが、本書は応仁元年〔1467〕尋尊写の内閣文庫蔵本に類し、後の書き入れを有する系統。ただし、本書の成立経緯を示した「裏付」冒頭の一段を欠き、「行仁上人記」での各神の鎮座地にも異同が見られるなど、検討すべき点も多い。

14 西九条十輪院地藏尊縁起

天文三年〔1534〕十輪院別当證恵本奥、延宝八年〔1680〕観音寺別当宥恵写、一軸。30.1 × 670.4 糎。表紙・巻軸部後補。端裏書「西九条十輪院地藏尊」。奈良市十輪院町。本尊は石造地藏菩薩像。もとは元興寺の子院であったが、鎌倉期の建築・彫刻が伝来しており、この時期から、梵舜本『沙石集』巻七・十七「仏ノ鼻黒クナシタル事」末尾に見られるような独自の地藏信仰があったことが知られる。

南都ニ尼公アリケリ。矢田ノ地藏ヲ年来信ジ奉テ、二心ナク供養恭敬シ、名号ヲヘケルタビゴトノ始詞ニ、「福智院ノ地藏モ、十輪院ノ地藏モ、知足院ノ地藏モ、マシテ市ノ地藏ハ思ヒバシヨラセ給候ナ。南無ヤ尼が矢田ノ地藏大菩薩」ト、唱ヘケリ。コレモ鼻フスブルホドノ心ザシナルベシ。

なお、十輪院・元興寺文化財研究所編『ならまちの地藏霊場 十輪院の歴史と信仰』（京阪奈情報教育出版、2021）に拠れば、〔江戸時代中期〕写『十輪院略縁起』（十輪院蔵）が「今日知られている十輪院の縁起としては最も古い」とされていた。したがって本書は、中世の十輪院地藏信仰のありかたを少なくとも室町時代に遡って考えるための重要史料といえよう。

15 大和国添上郡大安寺伽藍再興絵図

〔江戸時代〕刊。50.0 × 35.7 糎。

16 融通念仏縁起絵巻切

〔室町時代後期〕。30.7 × 16.8 糎。下巻第六段、城南寺供僧である心源が夢に見た父母が阿弥陀三尊に導かれて極楽に向かう場面を描く。なお、台紙裏には近代の筆で「室町時代初期／長谷寺縁起の断欠」とある。

17 灌頂雑集

天正四年〔1576〕肥後願成寺十三世 釈勢辰写、綴葉装。存二巻二帖。上帖 25.2×15.7 糎、下帖 25.0×15.8 糎。上帖の末尾には、永正八年〔1511〕に高野山無量光院の学匠、印融〔1435-1519〕が高野山仙順房所蔵本に拠って書写した旨を示す本奥書を持つ。元来、『灌頂雑集』六巻は高野山西

院智明院澄円が正応五年〔1292〕に著した、三宝院流伝法灌頂の本式および治承記の口決で、灌頂の諸事について秘儀を説いたもの。高野山金剛三昧院・高野山龍光院に室町中期頃の写本が伝来する他、善通寺等に享保十四年〔1729〕の写本が伝わる。

本書は、全六巻のうち巻一および巻二を書写したもの。勢辰が六巻全てを書写したのかどうかは不明だが、現存本の外題（原装表紙の原貼題簽）および内題に見える「第一」「第二」を「第上」「下」となるように重書訂正が施される。現在、願成寺に伝来する、本書をもとに猷禪が宝暦八年〔1758〕に書写した本では、外題を「第一 上」「第二下」としていることから、江戸中期の段階で既に現在の重書訂正が行なわれていたらしい。

本書にとって最も重要なことは、天正十三年〔1585〕に羽柴秀吉の兵火によって根来寺が大きな被害を受ける直前、根来寺を訪れていた勢辰が書写した一本であるという点である。天正二年に初めて根来寺を訪れて以後の勢辰の動向については、中川委紀子「願成寺勢辰にみる中世末期根来寺教学の一断面」（『根来寺史』史料編一、1987）に詳しいが、本書の存在によって、勢辰書写聖教の全容解明にまた一歩近づいたと言えよう。

18 那智山略縁記

〔江戸中期〕刊、一卷一冊。23.1×15.6 糎。

19 紀伊国日高郡 道成寺略縁起

〔江戸中期〕刊。鴻山文庫旧蔵。江戸時代に道成寺で版行・配布されていた略縁起。この他にも複数版の冊子が配布されていたものと推定される。観音の靈験によって髪がのびるとするのではなく、醜い海人の娘が一夜にして美貌の女性と変じるとする。また道成寺近傍の王子社を「九海人王子」としており、中世前期以前の「くわま王子」から現在の「海士王子」の中間的名称となっている点にも注意したい（初例は文明五年〔1473〕本奥書『九十九王子記』）。

20 紀伊国日高郡 鐘巻道成寺縁記

〔江戸中期〕刊。鴻山文庫旧蔵。

21 道成寺建立縁起残欠

〔江戸中期〕写、一軸。25.5×58.0 糎。

22 高野山^{あらかわ}領安楽川莊市場村伊勢森 皇大神宮御縁記

安政二年〔1856〕、南紀城東隠士畠山将二源重政写、一軸。30.5×489.1 糎。伊勢森皇大神宮の創建は、久寿二年〔1154〕の鳥羽院熊野御幸を発端とし、永暦元年〔1160〕の美福門院発願によるとする。その間、保元の乱の顛末を含めて詳述する点、興味深い。その後、天正十三年〔1585〕の秀吉による紀州征伐を経て、安政二年に社地を整備し、社殿を再建したことが示される。『紀伊国続風土記』安楽川莊下・市場村・大神宮には「一村の産土神なり、平野氏所蔵応永の旧記に伊勢森とある即是なり、里人美福門院の草創といふ」。歴史地名大系・和歌山県には「安政二年に社地を大整理したと伝え、その時の勧進帳にも、美福門院がこの地に住した折、勧請したと記してあったと伝える」とされるが、あるいはこの「勧進帳」とあわせて本書が制作されたとするべきか。

23 大須観世音略縁記

〔江戸時代末期〕、真福寺宝生院第四十七世政英写、一軸。34.7 × 171.6 糎。积政英は明治十八年〔1885〕寂。『北野山真福寺天満宮来由略記』と料紙・装訂を同じくする。幕末から排仏毀釈に至る激動期において、寺社縁起および自寺の歴史を叙述・整定しようとする試みの一例として捉えられる。

24 北野山真福寺天満宮来由略記

〔江戸時代末期〕、真福寺宝生院第四十七世政英写、一軸。34.7 × 186.1 糎。

諸国遍歴と縁起—修験・巡礼・古美術調査—

25 西国三十三所順礼元祖十三人先達御影像

〔寛文七年〔1667〕〕刊、江戸後期印、紙本墨摺、一鋪、37.4×25.9 糎。西国霊場第六番札所・南法華寺（壺坂寺）において板行された御影像。同じく壺坂寺で板行された寛文七年〔1667〕刊『西国三十三所順礼縁起』と内容が一致する点からして、これと同時期に板行されたものか。なお、本品に類しつつも全く図像の異なる御影像の版木が第七番・岡寺に伝存しており（浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版、1990）、同寺からも別に板行されていたことが知られる。

26 西国三十三所順礼縁起

寛文七年〔1667〕刊、紙本墨摺、一冊、23.2×16.1 糎。南法華寺が所蔵する版木によって、学界に知られていた順礼縁起。摩滅著しい版木では判読不能箇所が多々見られるが、本書によって全体を通読することができる。その内容は、十六世紀前半段階の縁起に見られた威光上人閻魔王宮訪問譚を持たず、また、近世に多く流布する一般的な西国順礼縁起とも異なっている点で注目される。

27 西国順礼大縁起

貞享三年〔1686〕本奥書、宝暦十三年〔1763〕写。27.1 × 18.9 糎。稲垣泰一「『西国順礼大縁記』について—解説並びに翻刻文、校訂・解説文—」（文教大学『言語と文化』26,2013）が紹介する稲垣氏蔵本には奥書が見られない。ただし、その本文はほぼ一致し、かつ同筆と認められる。

28 西国順礼細見絵図全

粉川かなごや善兵衛板。紙本墨摺、一鋪（附原表紙）。61.6×67.8 糎。

29 西国三十三所順礼絵図

文化四年〔1807〕求版、紙本墨摺、一鋪。57.7×65.7 糎。

30 改正新版西国順礼独案内図

文化元年〔1804〕刊、紙本墨摺、一鋪。30.0×78.5 糎。

31 清水寺縁起 断簡

〔江戸前期〕、紙本著色、一軸。33.0×130.9 糎。伝弘治元年 [1555]。清水寺観音の靈験によって、捕らわれた悪七兵衛景清が牢から抜け出たとする幸若舞曲「景清」で著名な場面を「追加」として描く。

32 鎌倉順礼記

〔江戸時代中期〕写、二卷二冊。沢庵宗彭 (1573-1646) 著。大徳寺住持。いわゆる紫衣事件によって流罪。蒐書家 (殊に地誌関連) として知られる高木利太 (1871-1933) 旧蔵書。

33 〔當山派山伏入峯作法書上〕

〔江戸前期〕写、一軸。32.7 × 235.3 糎。内題「□〔詣〕而書上 當〔山〕□先達」。奥書「慶長十六年霜月 日／圓光寺和尚／金地院和尚」。慶長十一年 [1606]、圓光寺・金地院に宛てられた書上の写。大峯修行の由来から説き始めるもので、近世初頭における修験道の実像を考える上でも貴重な史料。

34 日域六十余州道中日記集

〔宝永七年 [1710]〕行脚僧即性自筆、二卷二冊。紙本彩色。上下巻とも 23.7×17.4 糎。宝永七年におそらくは東国の修験者であった行脚僧の即性という僧侶が諸国をめぐって見聞を記すとともに、参詣した寺社の絵図を写したもの。肉筆挿絵を伴う近世の道中記としては、他に和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵『西国巡礼道中笑草』や舞鶴市糸井文庫蔵『西国順礼略打道中記』がある。

35 日本廻国六十六部縁起

〔江戸時代後期〕写、一卷一軸。23.1×401.5 糎。法華経を六十六度書写し、それを日本全国六十六箇国の霊場に一部ずつ納経する廻国聖。十六世紀に最盛期を迎え、近世には「六部」と呼ばれる単なる廻国聖となった。本書は、六十六部廻国の由来譚を述べる縁起。源頼朝および源平合戦の顛末を淵源と物語る。

36 寺社宝物展覧目録

江戸時代後期写、五冊 (山城上、山城下、大和上、大和下、山城并追加)。16.1 × 12.0 糎。寛政四年 [1792]、幕命を受けた儒学者・柴野栗山と絵師・住吉廣行が山城・大和における古社寺を点検・閲覧した際の目録。岡倉天心・フェロノサによる古美術調査に先立つ調査行として興味深い。続々群書類従所収本は黒川真道蔵本。本書にも見える朱書は黒川本にも見られるが、黒川本には屋代弘賢の注記が見える。本書の識語には同筆で「右ハ住吉廣行申上之控借写之云々」、異筆で「庚戌秋日重陽前一日 峨眉僧堂置」とある。同筆の「右ハ～」は、東京藝術大学・脇本文庫蔵本にも見え、続いて文化元年 [1804] の本奥書が記される。本書もこの時期に書写された一本と考えられる。